特集

悪性腫瘍と外科

Malignant Tumors in Surgery

緒言

Introduction

村上 忠 重*

TADASHIGE MURAKAMI, M.D.

第178回順天堂医学会学術集会を上掲のような
 標題のもとに行なうべく世話役を命ぜられた。そ
 こで私はこれを機会に外科領域における各科にお
 いて悪性腫瘍を如何に取扱っているか比較してみ
 たいと思った。もちろん外科領域の各科であるか
 ら、悪性腫瘍に対して手術を第一義とすることに
 は違いはない。しかしそれに制癌剤を如何にから
 み合わせるか、また放射線療法を如何に利用するか、
 そして最終的には悪性腫瘍を如何に考えている
 か、どんなことをしてでも治そうと努めている
 か。多少でも命が延びればよいと諦めているか。
 運のいい患者だけが救かり、運の悪いのは死ぬの
 だと割り切っているか。この患者は失っても止む
 を得ないが次に同じケースがあったら救けて見せ
 ると治療法の合理化に努力しているか等々の問題
 意識をくらべてみようと思った。いなそれを通じ
 て私自身の考え方を反省してみたいと思った。

幸い整形外科、脳外科、胸部外科、小児外科、
 婦人科、泌尿器科、ならびに消化器内科の参加を
 得、私共の消化器外科を含めて外科療法を必要と
 するすべての科における悪性腫瘍治療の実態を話
 し合うことが出来た。そして非常に参考になる
 discussion を交わし得たと考える。

短い時間のうちに以上の注文を果すためにあら
 かじめ参加の各演者にはなるべくその科における
 治療の現況を統計を用いて説明してもらうように
 依頼した。そして講演後の討論にあたっても以下
 のようなテーマを示してその答を用意してもらっ
 た。すなわち 1)根治手術の適応決定に際して
 Riskとのかね合いの問題、2)リンパ節廓清の程度
 の問題、3)広範囲切除後の血管移植などの必要性
 の問題、4)姑息手術の意義に対する考え方ならび
 に根治手術との予後の差異、5)制癌剤がどの程度
 効果をあげうるかその信頼度および放射線療法の
 価値、6)手術後の機能欠除に対する補正法と社会
 復帰の問題、7)悪性腫瘍治療法の将来に対するビ
 ジョン等々である。

これらの質問に対する各科の答えは、各科にお
 ける悪性腫瘍に関する考え方、ないしは各科の治
 療法中における悪性腫瘍の位置をかなり明らかに
 したように思われる。

シンポジウムに参加された各位に厚く感謝の意
 を表する次第である。

なお、本特集は順天堂医学会第17回学術集会
 (1971.9.16)記録である。

* 順天堂大学医学部教授 (外科学)
Professor of Surgery, Juntendo University,
School of Medicine.
 [Feb. 8, 1972受付]